Osaka University Knowledge Archive

Title	2020-2021年度短期オンライン日本語教育プログラム実践報告
Author(s)	福良, 直子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2022, 26, p. 55-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86448
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

2020-2021年度短期オンライン日本語教育プログラム実践報告

福良　直子*

要　旨

本稿は、2020年度（冬季）および2021年度（夏季）に、本学の国際教育交流センターの短期プログラム開発研究チームと日本語教育研究チームが協働で実施した、短期オンライン日本語教育プログラムの実践報告である。プログラムの概要を述べた上で、参加者によるプログラムに対する評価から、今後の短期オンラインプログラム改善に向けた課題を示す。

【キーワード】短期日本語教育プログラム、オンラインプログラム、評価

1　はじめに

本学の国際教育交流センターでは、学部・大学院正規留学生や非正規の研究生・短期留学生などを対象とした日本語教育プログラムに加え、主に海外協定校の推薦を受けた学生を対象とした、複数の短期日本語教育プログラムを実施している。

例えば、J-ShIP（Japanese Short-stay In-Session Program：学期内ショートステイ日本語専修プログラム）は、2011年度から実施されており、例年、夏季（6月～8月、約8週間）と冬季（1月～2月、約4週間）に開講される。夏季は、日本語初習者を対象とした基礎日本語教育、冬季は、主に初級日本語プログラムを修了した学生を対象に、中級レベルの日本語教育を実施している。その他にも、夏季（8月、約3週間）と春季（2月、約3週間）に実施される、Intensive Programなどがある[1)]。

2019年度は、夏J-ShIPに54名（米国のカリフォルニア大学、ケンタッキー大学など）、夏Intensive Programに43名（中国の大連理工大学、西南大学）、冬J-ShIPに34名（オーストラリアのモナシュ大学、韓国のソウル神学大学校）の参加者があったが、2020年度と2021年度は、covid-19の感染拡大により、上記プログラムの中止が決定された。そのため、短期オンライン日本語教育プログラムを新たに実施することとなった。

本稿は、2020年度（冬季）および2021年度（夏季）に行われた、日本語が中級前半レベルの学生を対象とした、短期オンライン日本語教育プログラムについて報告するものである。

2　短期オンライン日本語教育プログラムの概要

本プログラムは、西口（2014）で述べられている、OUSカリキュラム（大阪大学としての標準的なカリキュラム）の課程では、「進んだ基礎日本語段階」に相当する。西口（2014）は、「進んだ基礎日本語段階」、いわゆる初中級の段階の大学での日本語教育について検討し、「口頭言語についてまだ実用的な能力が身についていないこと及び、その一方で書記言語という言語活動領域が加わることを認識しつつ、口頭言語と書記言語の両様で論理的で幾分学問的な基礎的言語活動に従事できるようになることに絞って目標を設定するのが適当」であると主張している。

本プログラムは、西口（2014）で示されている「進んだ基礎日本語課程のカリキュラムの構想」が基盤となっており、「自己表現活動に関する各種のテーマ」と「「人と社会」に関する各種のテーマ」を柱として、基礎後期の日本語の再学習および中級前期の

*　大阪大学国際教育交流センター講師

学習を行うことを目的としている。本プログラムの新しい試みとして、授業に加え、予約制で自由参加の大阪大学の学生との会話セッションや、コーディネーターによるオフィスアワーの機会も設けた。これらについては、2-5および2-6で後述する。

以下、プログラムの実施期間、受講者、授業の内容について述べる。

2-1　実施期間

2020年度（冬季）は、2月1日から2月19日まで、2021年度（夏季）は、8月2日から8月31日まで実施した。授業は、一日2コマ（1コマは90分）、全30コマ（45時間）で、2020年度は期間中毎日、2021年度は週に3～4日の授業を行った。

2-2　受講者

2020年度は、モナシュ大学から6名、ソウル神学大学校から4名、計10名の参加があり、2021年度は、中国の大連理工大学から4名、西南大学から1名、計5名の参加があった。

学生の専攻は、多岐にわたり、日本語専攻に加え、会計学、財政学、宇宙物理学、生物医学、コミュニケーション・メディア学、コンピュータサイエンスなどであった。

2-3　授業の概要

本授業は、Web会議ツールZoomにより、リアルタイム型[2)]で実施した。2名の講師によるティームティーチングで、筆者はコーディネーターとして、プログラムの企画および運営に携わった。

教科書は、国際教育交流センターの日本語中級前半クラス（レベル300）[3)]で使用している『NIJ：A New Approach to Intermediate Japanese テーマで学ぶ中級日本語』を用いた。各課は、会話パートとレクチャーパートで構成されており、巻頭の「NIJの特長」によると「まずテーマについて内容と言語を学習し、その後にそのテーマについて学習者各自が自身のことや自分の考えや意見を話したり書いたりする活動がデザイン」されている。

短期オンライン日本語教育プログラムでは、全12課のうち5課を取り上げた。会話パートでは「私の町と歴史」「子供の頃の思い出」「大学時代の勉強と経験」など、個人に関するテーマを扱った。レクチャーパートのテーマは、「子どもと学校」「社会の変化とわたしたちの生き方」「仕事」「多様な働き方と生き方」などであった。

授業では、本学の国際教育交流センターで作成された、音声付きPPTの動画などを用いながら、テキストの内容や語彙、文法表現などを学習する。その後、各パートのテーマについてディスカッションを行い、宿題としてエッセイを書く。例えば、「仕事」がテーマの課では、学生は、自分の国で新卒採用の慣習があるか、新卒採用についてどう思うか、などについて話し合う。ディスカッションした内容にもとづいて、学生は自分の考えや意見を書き、教員による添削をもとに修正したエッセイを授業で発表し合う。このような一連の活動により、さまざまなテーマの学習を通して、日本語能力の総合的な向上が期待される。

2-4　プレゼンテーション

授業では、上述した教科書を用いた学習に加え、学生によるプレゼンテーションを実施した[4)]。2021年度は、2020年度の実践を踏まえ、「好きなもの・好きなこと」、あるいは「自分の故郷」のどちらかについて発表することとした。さらに、「何について発表すればよいかわからない」という学生のために、授業中に一人一回、「Brain storming session」として、プレゼンテーションの準備時間を設けた。発表予定の学生は、自身が選んだトピックについて、クラスメートが具体的に聞きたいと思っていることを尋ね、より良い発表にするために話し合う時間とした。例えば、ある学生の「私の故郷」については、クラスメートから、思い出の場所、観光スポット、名物、街の歴史や変化などについて聞きたいという意見が出され、発表に反映された。その他、学生が発表したトピックには、好きなものとして、アニメやゲーム、日本の作家、日本料理などがあった。日本に興味を持つようになったきっかけや日本国内を旅行した経験、家族との旅行についての発表もあった。

2-5　オフィスアワー

授業に加え、2020年度は予約制の自由参加、2021年度は参加必須のコーディネーターによる「オフィスアワー」をプログラム実施期間中、週に1時間（2グループに分けて30分ずつ）実施した。元来のオフィスアワーとは異なり、2021年度に参加を必須としたのは、授業を担当する講師から、授業中に一人ず

つ発音をチェックする時間が十分に確保できないとの声があり、オフィスアワーを活用することにしたためである。学生には事前に教科書の該当ページを示し、練習してくるよう宿題を課した。発音チェックの他には、各自の学習の進捗状況を尋ね、オンラインの学習で困っていることなどがないか、学習相談を行う機会としても、当該時間を活用した。

2-6　会話セッション

2-6-1　セッションの概要

授業の他に、事前予約制で自由参加の「会話セッション」を設けた。大阪大学の学生にサポーターとしてアルバイトで協力してもらい、表1に示したトピックを中心に話す時間とした。参加したサポーターは、2020年度は8名、2021年度は9名であった。プログラム期間中、2020年度は5回、2021年度は6回（1回は1時間）実施した。

表1　会話セッションのトピック

	トピック
第1回	自己紹介、趣味や特技、好きなもの・好きなこと
第2回	自国のお菓子や飲み物を紹介しながらお菓子パーティー コロナ禍での大学生活（授業、サークル活動、友人との交流など）について
第3回	子供の頃の思い出（小中高のエピソード、印象に残っている先生やクラスメートの話など）
第4回	今までで一番嬉しかったこと・一番恥ずかしかったこと（失敗談のエピソード）
第5回	子供の頃の夢、専門を選んだ理由と現在の夢
第6回	自由におしゃべり

筆者は、トピックの提示と時間管理、話したことを全体で共有する際の司会のみを行い、できる限り留学生とサポーターが交流できるよう心がけた。

サポーターには、事前説明会への出席を必須とし、オンラインコースの概要や会話セッションの目的、サポーターの活動内容を理解した上で参加してもらうようにした。また、サポーターには、会話セッション終了後、サポートの内容やコメントを書く「サポーター活動報告書」の提出を依頼した。報告書の目的は、日本語の授業への活用や今後のプログラムの改善のためであり、サポーターにもその旨を伝えている。サポートの内容は、具体的には、その日に話した内容や、留学生からの質問への対応、サポート時に工夫したことや困ったこと、などである。

2-6-2　受講学生からのコメント

会話セッションは、2020年度、2021年度ともに、非常に好評であった。その理由として、受講学生の以下のコメントから「同世代の日本の学生と話せたこと」「サポーターの熱意が伝わってきたこと」「友人関係が築けたこと」などが挙げられる。なお、以下コメント中の下線部は筆者による。

- とても楽しかったです。先生ではない一般の日本の大学生と話せて、いい経験でした。
- 同年代の外国人と話ができたのは初めてだったので、ボランティアの方と話ができてとても嬉しかったです。サポーターたちはとても親切で、私たちを励ましてくれました。また、サポーターの方々と連絡を取り合った後、素敵な写真を共有することがありました。
- 私の日本語が下手なのに、一緒に話を続けようとする姿が見えてありがたかったです。
- サポーターたちは明るくて熱心な人です。会話セッションはちょっと短いので、いろいろなこと話したいですが、時間がないので残念ですね。
- Building friendship with the Japanese students is one of the most fascinating part in the free talk session.

その他には、「前回のセッションで話した人と同じグループが良い」（It's really fun! It could be put into the same group with the student whom I talked to in the previous session.）とのコメントがあり、今後、会話セッションのグループを構成する際に考慮すべき点であると言える。

2-6-3　サポーターからのコメント

以下のサポーターのコメントからは、オンラインの利点を活かし、Zoomの各機能を駆使しながら会話セッションに参加していたことがうかがえる。

- 途中で意味が通じないことがあるとチャットに書き込み説明しました。（中略）画面共有で写真を見せるなど、理解してもらうために工夫をしました。

また、下記のコメントからは、受講学生の日本語学習に役立つよう、サポーターが各自で考え、工夫をして取り組んでいたことがわかる。

- 会話セッションでは気楽に敬語なしで友達に普段話すような様子で話すようなこともした。いろいろな日本語に触れることで少しでも留学生の皆さんの学びに貢献できたことを願う。
- 留学生の皆さんが話してくださったことにはできるだけ質問をし、リスニングとスピーキングの両面で日本語が勉強できるようにしました。

その他には、下記のように、受講学生の学習に対する姿勢に感銘を受けたというコメントが多数見られ、受講学生との交流を通した学びや気づきが述べられていた。

- 参加留学生の皆さんが日本に興味を持っていて言語や文化を意欲的に学ぼうとする姿勢を感じたし、自分自身も中国について新たに多くのことを知ることができました。
- 今回の交流を通して、相手の文化を知るのは大切だけれど、それ以上に、自分の文化に精通している必要があるなと感じました。

以下のコメントからは、オンラインという制約がある中でも、会話セッションを通して、受講学生とサポーターが楽しみながら学び合い、交流を深めていった様子がうかがえる。

- 異文化についてたくさん学べたことはもちろん、同じアジアの国ということもあり、思っていたよりたくさん共通点があったことがとても嬉しかったです。（中略）流行しているアニメが同じだったり、笑いのツボが似ていたところも嬉しかったです。最後には、話し足りなくなるほど仲良くできることができました。これを機に、これからも親睦を深めることができたら、と思います。
- 1日目は主に中国と日本の文化の違いに関する気付きが多かったですが、2日目は留学生のみなさんの過去の経験などパーソナルな部分もたくさん知ることができたのが嬉しかったです。この会話セッションを通してもっと日本に興味を持ってもらい、いつか自由に渡航できるようになった時に対面でお会いすることができたら素敵だと思います。

さらに、上記で述べられているように、会話セッションを契機として、今後の交流が続いていくことが期待される。

3　プログラム終了後のアンケート結果

プログラム終了後のアンケートでは、プログラムの内容および受講学生自身の日本語学習などについて尋ねた。2020年度は、10名中8名、2021年度は5名中4名から回答があった。

3-1　プログラムの期間と授業時間数

プログラムの期間については、3段階の選択肢（1：長い、2：ちょうどよい、3：短い）による回答で、2020年度は、8名中2名が「3」、6名が「2」と答えた。プログラムの計画段階では、3週間のオンラインプログラムは長すぎるのではないかという懸念もあったが、「長い」との回答はなく、受講生にとっては、問題がなかったようである。

2021年度は、週に3～4日の授業実施に変更した。期間が約1か月間にわたったためか、4名中2名が「1」と回答し、2名が「2」と答えた。

授業時間数については、2020年度は「オンラインの授業が毎日あったのはどうでしたか」との質問に対し、「1：大変だった、2：どちらとも言えない、3：大変ではなかった」の3段階で回答を求めた。8名中6名が「2」、2名が「3」と答えた。「3」の回答のうち1名は、自由記述欄に「We just need to open the laptop instead of going to school. It is not hard at all.」と書き、通学の負担がないオンラインプログラムへの参加のしやすさに言及していた。また、プログラムの一日の授業時間については、2021年度は、「1：長い、2：ちょうどよい、3：短い」の3段階で、4名全員が「2」と回答した。

3-2　学習環境

2021年度については、学習環境について、授業終了時に毎回アンケートにより「どこで授業を受けていたか」、「授業に集中できたか」を尋ねた。全員が「自宅」と答え、大半が「とても集中できた」との回答であったが、同じ学習者であっても、日によって「あまり集中できなかった」との回答も見られた。その理由としては、「インターネットのアクセスがときどきできませんでした」、「時間が長いのにいつでも集中（※する）[5]のはちょっと難しい」などが挙げられていた。3-1で述べたように、2021年度の学生は

一日の授業時間について「ちょうどよい」との回答であったが、このように、授業中、集中し続けることは難しいとの声も聞かれた。快適な学習環境の確保および適切な授業時間の設定は、オンラインプログラムを実施する際の重要な課題の一つであると言える。

3-3　課題と自宅学習時間

授業外での学習について、課題の量と学習時間を尋ねた。「宿題やエッセイの量はどうでしたか」との質問には、下記のような5段階で回答を求めた。

1．とても多い
2．多い
3．どちらとも言えない
4．少ない
5．とても少ない

2020年度の学生は、8名中5名が「1」、1名が「2」、2名が「3」と回答した。半数以上の学生が、宿題やエッセイの量が多いと感じていたようである。しかし、「1」と答えた学生の自由記述欄には、「でも、役に立ったと思います」「毎回宿題があったので、ちょっと大変でしたが、結果、すごく勉強になりました」とのポジティブなコメントも見られた。2021年度の学生は、3名が「多い」、1名が「どちらとも言えない」との回答であった。

「プログラム期間中、家で1日、日本語をどのくらい（何時間）勉強しましたか」との質問には、2020年度の学生は、「4時間以上」が8名中3名、「3時間」が2名、「2時間」が3名であった。「4時間以上」と答えた学生のうちの1名は、自由記述欄で「Learning Japanese four hours a day can improve my Japanese in an instant rate.」と述べ、プログラム中の家庭学習の効果が示されていた。

2021年度の学生は、4名中1名が「3時間」、3名が「2時間」と回答した。2020年度、2021年度ともに、学生は授業外での学習にも熱心に取り組んでいたことがうかがえる。

3-4　日本語の上達

「今回のプログラム全体を通して、日本語の上達に満足していますか」との質問には、下記の5段階で回答を求めた。

1．とても満足している
2．満足している
3．どちらとも言えない
4．あまり満足していない
5．満足していない

2020年度は、8名中7名が「1」、1名が「2」と答えた。「1」と回答したうちの2名は、自由記述欄に「日本語でいっぱい話せて、本当によかったです」、「Yes. My Japanese writing skill, oral speaking has improved a lot along with the talking session and assignment of this program.」との回答があり、話す力や書く力の上達が実感されていることがうかがえる。

2021年度は、4名中1名が「1」、3名が「2」と答えた。その理由として、「1」と回答した学生は、自由記述欄に「発音、文法、会話力を鍛えました」と書いていた。「2」と答えた学生は、「いろいろなテーマの作文を書きました」「今、日本語会話ができました。単語もたくさん勉強しました。日本のことたくさん了解（※理解）しました」「皆さんと話して、日本語の授業を受けて、とても満足でした」との理由が挙げられた。

以上より、2020年度、2021年度ともに、学生は自身の日本語の上達に対して、満足度が高かったものと言える。

3-5　本プログラムの魅力

本プログラムについて「最も魅力的だった点は何ですか」との質問には、2020年度も2021年度も、「日本語でクラスメートや教師と話せたこと」を最大の魅力だったとする回答が最も多くみられた。具体的には、以下のような回答があった。

- 日本人の方々と交流できます
- 日本の皆さんと話す（※ことが）できます
- 日本人先生と対話ができるということ
- 直接話せる機会
- 会話セッション
- 普段、日本語で話す機会がなかったんですが、授業のおかげで日本語の会話能力が上がったと思います。そして、いろんな国の人と話ができたことも楽しかったです。
- The teacher explained everything well. We were provided a lot of chances to speak with other people. This helped me feel more confident in using Japanese.

さらに、以下のように「クラスメートと共に学べたこと」も魅力として挙げられていた。

• 他の国の方々と一緒に日本語を勉強することが好きだった。
• Networking and making friends

オンライン授業における学生間のネットワークについて、福良（2021）では、「学生間で互いにサポートし合えるような関係構築が困難」であるため、「教員が率先して、学生間のネットワーク構築を促すような活動を取り入れる必要がある」との指摘がある。上記のコメントにあるように、本プログラムで学生同士のネットワークが構築された背景には、授業中の教員による働きかけに加え、会話セッションにおけるサポーターの役割も大きかったものと推測される。

その他には、「日本に関する知識や文化を学べた」ことや「中国人の先生に教えてもらったこととは違う方法で、日本人の先生に教えてもらうことができたのが良かった」といった回答もみられた。

3-6　今後、学んだ日本語をどう活かしたいか

「このプログラムで学んだ日本語を、今後母国でどのように活かしたいですか」との質問には、2020年度も2021年度も、自身のキャリアや趣味に活かしたいとの回答がみられた。

具体的には、「日本で働きたい」「自国の日系企業への就職に役に立つ」「資格を取りたい」「自分の専門に活かす」「日本語を使ってボランティア活動をする」「アニメを見る」などであった。

その他には、「このプログラムで学んだ事をもとに、もっとネイティブ（※のように）話せるように、頑張って日本語の勉強をしたいです」「授業で学んだ日本語方法を使って、もっと勉強します」といった回答もあった。これらのコメントからは、本プログラムがキャリア形成や自己実現、趣味の充実にも資する、さらなる日本語学習への動機となったことがわかる。

3-7　改善点

プログラムについて改善してほしい点については、2020年度の学生からは、会話セッションについて「時間をもうちょっと増やしてもよいと思います」とのコメントがあった。

2021年度の学生からは、プログラムの実施期間について、「コースは1ヶ月間で、私たちの夏休みは通常1ヶ月間しかないので、少し長いです」との指摘があった。今後は、プログラムの実施期間について、学生の自国での長期休暇期間とのバランスも考慮していく必要があると言える。参加必須にしていたオフィスアワーについては、「授業とオフィスアワーの間の時間は短いです」とのコメントがあり、学生にとって負担となっていた可能性がある。授業がない曜日には、会話セッションがあり、オフィスアワーを授業時間前に設定することとなったためであるが、今後は参加必須の是非も含めて再考していきたいと考えている。

4　おわりに

本稿では、国際教育交流センターで初めての実施となった短期オンライン日本語教育プログラムの2020年度と2021年度の状況について、プログラムの内容を概観した上で、参加者による評価アンケートの回答を分析し、今後の課題について述べた。いくつかの課題はあるものの、2020年度、2021年度ともに参加者の満足度が高かったことから、今後は、短期日本語教育プログラムについて、対面での実施との両立の可能性も含め、検討を加えていきたい。

注

1）各プログラムの企画の背景や実践の経緯については、磯野・近藤・宮原（2016）および近藤（2012）が詳しい。
2）大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部のホームページ（https://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/）では、授業形式を「リアルタイム型」と「オンデマンド型」に分類している。
3）大阪大学国際教育交流センターでは、レベル100（入門）からレベル700（超上級）までの授業を提供している。
4）西口（2014）の「進んだ基礎日本語課程のカリキュラム」では「各学習者が得意で他の学習者も理解し楽しむことができるテーマでPPTなどのビジュアルを準備してプレゼンテーションをする」活動を「Show & Tell活動」と呼んでいる。
5）以下、理解に誤解を生じると思われる表現については、※で適宜修正した。

参考文献

磯野英治・近藤佐知彦・宮原啓造（2016）「2015年度短期日本語教育プログラムの実施と新たなプログラムの構築」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第20号，pp.19-24

近藤佐知彦（2012）「SSプログラムJ-ShIPの一年目――新コンセプト超短期日本語プログラムへの挑戦――」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第16号，pp.97-106

西口光一（2014）「総合中級日本語カリキュラム・教材開発のスキーム」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第18号，pp.77-86

西口光一（2016）「調和のある創造的で優れた教育を実践するための教育実践ガイドライン」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第20号，pp.65-73

西口光一（2018）『NIJ：A New Approach to Intermediate Japanese――テーマで学ぶ中級日本語――』，くろしお出版

福良直子（2021）「同期型・非同期型併用による上級日本語教育の実践――学部留学生を対象とした「総合日本語」の授業の振り返りから――」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第25号，pp.47-54